

奄美群島地域

土地分類基本調査

奄美大島南部

(西古見・湯湾・小湊・請島・古仁屋)

5万分の1

国土調査

鹿児島県

1983

序 文

調査地域は鹿児島県本土の南方 360 kmの洋上に位置する奄美群島中最大の島、奄美大島 710 km²の南部の 439 km²と加計呂麻島等 112 km²の 551 km²であります。

本地域については、県総合計画、奄美群島振興計画によって、交通体系の整備、社会生活環境施設等の整備、農業基盤の整備等を進めております、

本地域の大部分が山地で、平坦地が極めて少ない地形のため、農業は小規模ではあり、名瀬市南部及び大和村のスモモ、住用村の柑きつ類、瀬戸内町加計呂麻の黒糖用サトウキビ等の特徴ある農業が進められておりますが、なお一層、亜熱帯性の気候を生かした農業を展開する必要があります。

林地面積の広い林業については、自然林がほとんどで生産性が低いので、亜熱帯性気候、土性に合った適地適木を選定するとともに、林道等の整備を進めております。

昭和49年に奄美群島国立公園に指定された変化に富む海岸線、珊瑚礁、亜熱帯性の樹木等、観光資源に恵まれておりますが、石油ショック以後は観光客の減少が続いており、観光の活性化を図るため、観光リクリエーション施設の整備を進める必要があります。

本調査は、地形、表層地質、土壌等の自然条件及び土地利用現況等を科学的かつ総合的に調査したものです、

今後、この地域の土地利用計画や各種の企画立案に際し、基礎資料として広く御活用していただければ幸いです。

なお、この調査にあたって、資料の収集、図簿の作成等に御協力いただいた関係者の方々に深く感謝申し上げます。

昭和 59 年 2 月

鹿児島県企画部長

横 田 捷 宏

ま え が き

1. 本調査は国土調査法（昭和26年6月1日法律第180号）第5条第4項の規定により国土調査の指定をうけ、国土庁の国土調査費の補助金に依り、鹿児島県が事業主体となって実施したものである。なお、土壌生産力区分図、起伏量図については県単独事業として実施した。
2. 本調査成果は、国土調査法施行令第2条第1項第4号の2の規定に準ずる土地分類図及び土地分類調査簿である。
3. 調査は国土調査法土地分類基本調査の下記作業規程準則に準拠して作成した「鹿児島県奄美群島地域土地分類基本調査作業規程」に基づいて実施した。

地形調査作業規程準則 （昭和29年7月2日総理府令第50号）

表層地質調査作業規程準則 （昭和29年8月21日総理府令第65号）

土じょう調査作業規程準則 （昭和30年1月29日総理令第3号）

4. 調査の実施、成果の作成関係者は下記のとおりです。

総合企画・指導	国土庁土地局国土調査課	赤 桐 毅 一
	〃	榎 倉 克 幹
企画・調整・連絡	鹿児島県企画部開発調整課	福 村 紀 男
	〃	前 野 昌 徳
	〃	湯 川 秀 昭
地 形 分 類	鹿児島大学法文学部	
（水系谷密度、傾斜区分、起伏量を含む）		米 谷 静 二
	〃	石 村 満 宏
表 層 地 質	鹿児島大学理学部	露 木 利 貞
土 じ ょ う	鹿児島県農業試験場	穂 原 関 雄
	〃	草 水 崇
	〃 大島支場	小 原 秀 雄
	〃 〃	友 野 育 造
	〃	山 内 孝 平
	〃	瀬 戸 口 徹

土 じ ょ う	鹿 児 島 県 林 業 試 験 場	寺 師 健 次
土 地 利 用 現 況	鹿 児 島 県 企 画 部 開 発 調 整 課	前 野 昌 徳
土 壌 生 産 力 区 分	鹿 児 島 県 農 業 試 験 場 大 島 支 場	小 原 秀 雄
	鹿 児 島 県 林 業 試 験 場	山 内 孝 平
	鹿 児 島 県 企 画 部 開 発 調 整 課	前 野 昌 徳

5. 土地分類基本調査実施状況（成果印刷年度）

図 - 1

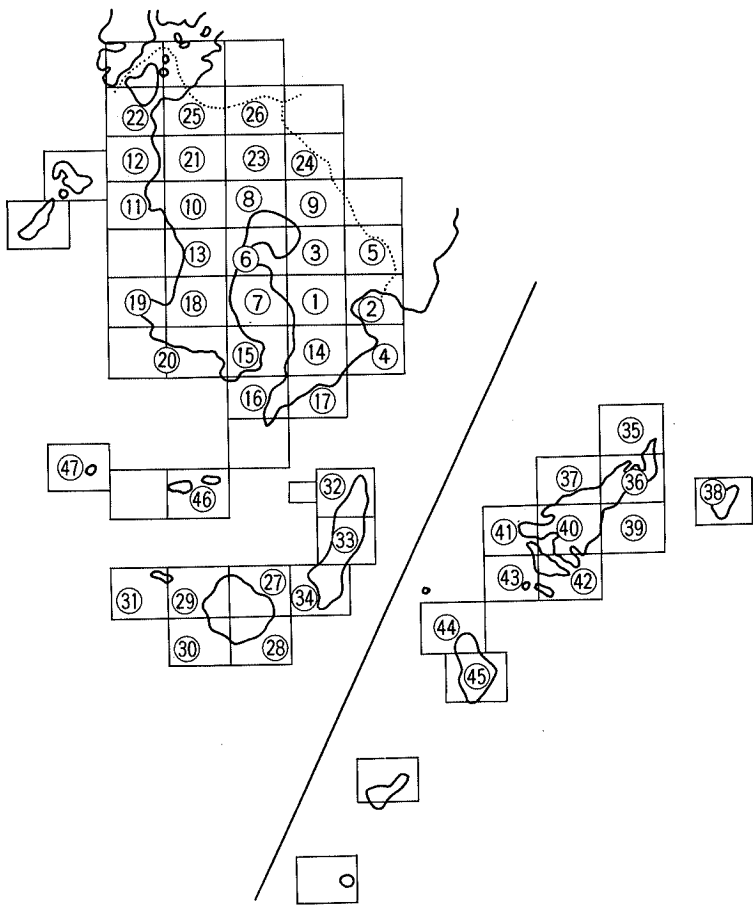


表-1 土地分類基本調査実施図幅一覧

年度	調査対象図幅	備考
45	①鹿屋 ②志布志	
46	③岩川 ④内之浦 ⑤末吉（県域のみ）	末吉図幅は県単独事業
47	⑥鹿児島 ⑦垂水 ⑧加治木 ⑨国分	
48	⑩川内 ⑪羽島 ⑫西方 ⑬伊集院	
49	⑭大根占 ⑮開聞岳 ⑯佐多岬 ⑰辺塚	
50	⑱加世田 ⑲野間岳 ⑳枕崎・坊	
51	㉑宮之城 ㉒阿久根	
52	㉓栗野 ㉔霧島山（県域のみ）	
53	㉕出水（県域のみ） ㉖大口（県域のみ）	54年度印刷,大口図幅に加久藤,佐敷図幅の鹿児島県域を合併
54	㉗屋久島東北部 ㉘屋久島東南部 ㉙屋久島西北部 ㉚屋久島西南部 ㉛口永良部島	55年度印刷（5図幅合併）
55	㉜種子島北部 ㉝種子島中部 ㉞種子島南部	56年度印刷（3図幅合併）
56	㉟笠利崎 ㊱赤木名 ㊲名瀬 ㊳喜界島 ㊴小湊	57年度印刷（小湊を除く4図幅合併）
57	㊵湯湾 ㊶西古見 ㊷古仁屋 ㊸請島	58年度小湊を加えて5図幅合併印刷
58	㊹山 ㊺亀津 ㊻薩摩硫黄島 ㊼薩摩黒島	59年度山,亀津合併印刷 60年度薩摩硫黄島,薩摩黒島合併印刷

奄美群島地域

土地分類基本調査

奄美大島南部

(西古見・湯湾・小湊・請島・古仁屋)

5万分の1

国土調査

鹿児島県

1983

位置図



目 次

序 文

まえがき

総 論

I 位置および行政区界	1
II 人 口	2
III 図幅内の地域の特性	3
IV 主要産業の概要	5

各 論

I 地形分類	9
II 表層地質	11
III 土 壌	15
IV 土地利用現況	21

〔地 図〕

地形分類図 表層地質図 土壌図 傾斜区分図 水系谷密度図

土地利用現況図 土壌生産力区分図 起伏量図

総論

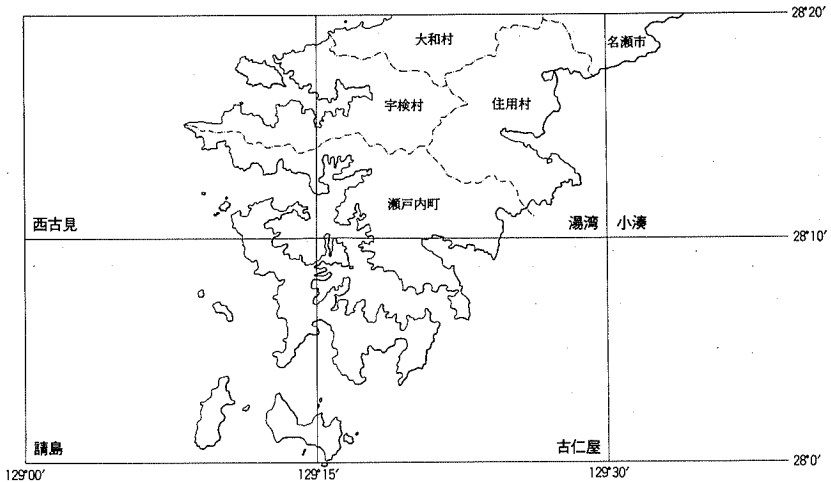
I 位置及び行政区界

位置：奄美大島南部は、鹿児島県本土の南南西 360 km の洋上に位置する奄美大島の南半部及び加計呂麻島、請島、与路島等の地域で、「西古見」「湯湾」「小湊」「請島」「古仁屋」の 5 図幅からなる。

図幅の経緯度は、東経 129° 0'～129° 45'，北緯 28° 0'～28° 20' の範囲であり、面積は 551 km²である。

行政区界：奄美大島南部の行政区界は、図 I - 1 に示すとおりで、大島郡宇検村、瀬戸内町、住用村の全域と大和村の一部、名瀬市の極く一部で占められている。

I - 1 行政区界



Ⅱ 人 口

調査区域の行政区内人口は、名瀬市、大和村、宇検村、瀬戸内町、住用村の70,546人である。

当地域の昭和55年10月の人口は、昭和45年10月及び昭和50年10月の国勢調査の結果と比べてみると増減率で1.0%の減、1.3%の増となっているが、これは名瀬市の増加の影響がでているもので、名瀬市以外は依然として減少傾向にある。特に住用村の昭和50年比は18.4%で二桁の減少が続いている。

表Ⅱ-1 地域の人口

市 町 村 名	昭和55年(10月1日現在)				人口増減率(%)		行政区域 面積 (kil)
	世帯数	人 口 (人)			対 45年	対 50年	
		総 数	男	女			
名 瀬 市	15,597	49,021	23,329	25,692	10.2	5.8	127.5
大 和 村	875	2,509	1,163	1,346	△20.0	△8.2	90.4
宇 検 村	1,038	2,594	1,197	1,397	△23.2	△2.9	102.6
瀬 戸 内 町	5,164	14,309	6,659	7,650	△17.2	△6.4	239.0
住 用 村	790	2,113	1,010	1,103	△28.9	△18.4	117.7
合 計	23,464	70,546	33,358	37,188	△1.0	1.3	677.2

注)昭和55年国勢調査による。

昭和55年の地域内の産業構造は、第3次産業就業者が50.6%、第2次産業就業者43.4%、第1次産業就業者6.1%となっているが、大島紬を中心とする製造業の第2次産業就業者、卸売・小売業、サービス業、運輸・通信業、公務等の第3次産業就業者が多く、農業等の第1次産業就業者が少ないのが特徴的である。

業種別では、地域の全就業者の70.1%を占める名瀬市の傾向を強く反映して、製造業、卸売・小売業、サービス業、建設業、運輸・通信業、公務、農業の順である。製造業は全市町村ともトップで30.6%と群を抜いている。卸売・小売業は全体で19.0%で2位に位置しているが、名瀬市が22.3%で、他の町村では4~7位である。全体で3位のサービス業は、宇検村が2位、他市町村は3位で高い比率を占めている。また、全体で4位の建設業に

高い比率の町村が多い。農業については全体で3.2%で7位であるが、名瀬市以外でも4～5位とそれほど比率は高くない。

当地域の就業者数は、昭和50年比較して7.8%の増であり、産業別では第3次産業就業者が16.3%、第2次産業が3.5%の増で、第1次産業が15.7%となっているが、構成比は第3次産業のみが3.7%の増で、第2次産業1.8%、第1次産業1.7%の減となっている。

表Ⅱ-2 就 業 構 造

市 町 村 名	就 業 者 数 (人)				就 業 構 造 (%)		
	第 1 次 産 業	第 2 次 産 業	第 3 次 産 業	計	第 1 次 産 業	第 2 次 産 業	第 3 次 産 業
名 瀬 市	591	9,595	12,426	22,612	(3.1) 2.6	(44.7) 42.4	(52.2) 55.0
大 和 村	148	714	336	1,198	(15.2) 12.4	(58.4) 59.6	(26.4) 28.0
宇 検 村	180	713	374	1,267	(19.6) 14.2	(55.1) 56.3	(25.3) 29.5
瀬 戸 内 町	861	2,528	2,847	6,236	(16.7) 13.8	(42.6) 40.5	(40.7) 45.7
住 用 村	178	440	324	942	(24.0) 18.9	(45.5) 46.7	(30.6) 34.4
合 計	1,958	13,990	16,307	32,255	(7.8) 6.1	(45.2) 43.4	(46.9) 50.6

注) 昭和55年国勢調査による。()内の数字は昭和50年国勢調査による。

Ⅲ 図幅内の地域の特性

本図幅は、奄美群島地域の奄美大島の南半とその属島の加計呂麻島、請島、与路島などからなる地域である。

奄美大島は、鹿児島市の南方360kmの洋上に位置し、北東から南西に長軸をもち、北の笠利崎を頂角に、南に底辺を有する三角形の島であり、面積710km²である。当該図幅はこの南半の439km²と加計呂麻島82km²、請島13.5km²、与路島8.9km²などの551km²の区域である。

地形は、大島本島の南部には300～500mの山地が連なり、平坦面は少ないが、山頂部に著しい緩斜面が発達している。また、沈降性地形を示すため海岸線は複雑である。低地部は、リヤス海岸の湾頭部に小規模の三角洲や谷底平野が見られる程度である。加計呂麻島は大島本島と大島海峡で隔っているが、海岸線は複雑に屈曲し、大島本島と同じように低地のほ

とんどない山地、丘陵地の島である。請島、与路島はさらに加計呂麻島の南にあり、加計呂麻島と同様、山地、丘陵地の島である。

地質は、ジュラ紀後期から白亜紀後期の湯灣層、大翻層、大勝層、名瀬層の砂岩、頁岩、砂岩頁岩互層、千枚岩、粘板岩、赤紫色凝灰岩、チャート、チャート粘板岩互層、石灰岩等の固結堆積岩が全域にわたって広く分布し、河川の河口付近や湾奥部の小低地に粘土、砂礫からなる未固結堆積物の沖積層が極めて小範囲に分布する。また、火成岩類としては花崗岩類、堆積岩に挟在する枕状溶岩及びこれを貫く塩基性岩の岩脈などがある。

高温多雨の当地域では、全般に風化が著しい。

気候は亜熱帯海洋性で年間平均気温 21.5℃、年平均降水量 3,011mm である。平均気温の最も低い1月・2月も14度台で霜をみることはなく、平均気温20℃以上の月が4～10月と長い。

降水量の集中するのは梅期の5月・6月及び台風の襲来する8月・9月で、それぞれ月平均降水量が300mmを越えている。台風の襲来は6月頃から始まり、8月に最も多く、冬の季節風とともに空路、海上の交通、農作物等に影響を与えている。

表Ⅲ-1 平均気温・平均降水量

名瀬

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年
気温	14.3	14.8	16.7	20.2	22.5	26.3	28.4	28.3	26.6	23.7	19.8	16.5	平均℃ 21.5
降水量	176	171	186	206	354	355	248	315	358	295	185	161	3,011 ^{mm}

注) 鹿児島県農業気象月報(昭和45～56年)による。

表Ⅲ-2 平均気温・平均降水量

古仁島

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年
気温	14.3	14.7	17.4	19.6	21.9	25.2	27.8	27.7	26.4	23.4	20.3	16.4	21.3℃
降水量	112	260	166	176	286	279	212	220	330	241	133	88	2503 ^{mm}

注) 鹿児島の気象百年誌による。(昭和52～57年)

定期航路は名瀬が鹿児島との間に1日2往復、阪神との間に月18往復、東京との間に月6往復のほか、沖縄との間に1日2往復平均等があり、古仁屋が鹿児島、徳之島等の間に2日1往復がある。

空路は鹿児島との間に6往復、大阪との間に3往復、那覇との間に1往復のほか、喜界島、

徳之島、沖永良部島、与論島を結ぶエアコミューターも発着している。空港から古仁屋までは名瀬乗継ぎで3時間数10分を要する。

島内の道路網は一般国道58号線、県道の名瀬・瀬戸内線等が骨格道路となっている。

IV 主要産業の概要

図幅に含まれる1市1町3村の昭和56年度における純生産額及びその産業別構成比は表IV-1に示すとおりであり、純生産額は県全体の3.7%（就業人口県対比3.8%）を占めている。

表IV-1 市町村内純生産額

市町村名	純生産額(千円)	構成比 (%)		
		第1次産業	第2次産業	第3次産業
名瀬市	64,965,669	2.0	27.2	70.8
大和村	2,775,221	12.2	38.2	49.5
宇検村	3,209,374	8.1	44.1	47.7
瀬戸内町	15,290,207	5.0	33.7	61.3
住用村	2,270,779	11.3	47.6	41.1
合計	88,511,250	3.3	29.8	66.9

注) 昭和56年度市町村民所得推計報告書

産業別構成比では、第3次産業が66.9%を占めて最も高く、第2次産業で29.8%、第1次産業3.3%であり、第1次産業の比率が極めて小さいのが特徴的である。また、名瀬市、瀬戸内町が地域内の純生産額のそれぞれ73.4%、17.3%を占めており、特に名瀬市の傾向が全体に表われている。名瀬市においては、第3次産業の70.8%が際立っているが、瀬戸内町も第3次産業が61.3%と比率が高い。他の3村では第2次産業と第3次産業の比率が約40~50%で伯仲している。

純生産額に占める業種別の比率をみると、サービス業が21.27%で最も高く、大島紬を主とする製造業が15.97%、卸・小売業15.10%、建設業13.40%、金融・保険・不動産業11.36%、公務9.88%が上位を占めている。

この地域は、急峻な山地が多く、ほとんど平坦地がないため、農業は極めて低調である。ほ場で比較的まとまった所は名瀬市の小湊、住用村の西仲間、宇検村の湯湾などで、野菜サトウキビ等が作付されている。

大和村のスモモ、住用村のポンカン及びタンカン等の果樹園地が増え特産地となっている。林業は、急峻な山地のため林野面積が88.3%と極めて広い分布を占めるが、人工林率は18.1%と低く、温暖多雨であるものの、台風、潮風等の気象条件から造林適地も限られるほか、ハブの生息地であることから、林業生産活動は必ずしも活発とは言えない。

樹種は、山腹中部から低山地にかけてリュウキュウマツが生育し、奥地の尾根付近にはイタジイ、イジュ等の広葉樹が生育し、山地の水系付近に一部スギの植林がみられるが生育は良くない。

林産物はパルプ用材がほとんどであるが、小規模にシイタケの栽培も行われている。

水産業は、四面を海に囲まれ、周辺海域には多くの好漁場を控えながら産業に占める割合は低い。これは台風、季節風などの諸条件に制約され、消費地に遠いなどでその活用が十分に図られていないためである。漁業の種類はカツオの一本釣りの沖合漁業が主体であり、他は瀬漁の一本釣りの沿岸漁業が大部分である。また、養殖業については、水質が清浄で四季を通じて高水温であり、また入江に富んだ地形などの好条件に恵まれ、モズク、真珠などが養殖されている。

表IV-2 地域の工業及び商業

市町村名	工 業										商 業					
	事 業 所 数									従 業 員 数			出生 荷 産 額 等品 (百朋)	商 店 数	従 業 員 数 (人)	年 間 販 売 額 (百朋)
	総 数	食 料 品	織 維 ・ 衣 服	木 材 ・ 木 製 品	化 学	窯 業 土 石	鉄 鋼	諸 機 械	そ の 他	計 (人)	4 人 以 上 (人)	1 〜 3 人 (人)				
名 瀬 市	762	65	624	16	-	9	2	6	40	2,749	1,935	814	19,703	1,316	4,317	103,912
大 和 村	22	-	20	1	-	1	-	-	-	136	134	2	251	38	63	522
宇 検 村	34	3	23	5	-	2	-	-	1	261	238	23	1,878	61	97	868
瀬戸内町	41	19	5	4	-	2	-	-	11	129	76	53	651	347	754	8,096
住 用 村	6	2	-	1	1	1	-	-	1	56	49	7	586	32	54	160
合 計	865	89	672	27	1	15	2	6	53	3,331	2,432	899	23,069	1,794	5,285	113,558

注) 工業：昭和56年工業統計調査結果による。
商業：昭和57年商業統計調査結果による。

工業は大島紬に特化している。大島紬は鹿児島県の代表的な地場産業であり、奄美群島の基幹産業の一つとなっているが、1事業所当りの従業者数が少なく家内労働者である。また、零細な黒糖工場や黒糖を主原料とする黒糖焼酎の製造等の食料品製造業も多い。そのほか木材・木製品製造、窯業・土石製品製造業等が続いている。

商業は卸売業の割合が非常に小さく、大部分が小売業である。

名瀬市には地域の拠点としての商店街が形成され、瀬戸内町の古仁屋にも商店が集中している。他の3村においては、ほとんど村内の購買力に依存している。

観光は奄美大島の地域経済において、重要な比重を占めているが、全国的な景気の低迷、競合地の沖縄観光の伸び等により、入込観光客は漸減の傾向にある。奄美大島の観光資源は、離島性、エメラルドの海、珊瑚礁等の海洋性、亜熱帯性等の南方的な自然景観であるが、交通の利便性を高め、観光客の志向の変化に対応し、各種観光施設の整備が必要である。

(前野昌徳)

各論

I 地 形

奄美大島南部（5万分の1地形図西古見・湯湾・小湊・請島・古仁屋の5区幅）は従順山形を示す小起伏山地が海拔500m前後に隆起したものを原地形とし、これに河川による浸食と海岸線の沈降が加わって現在の地形に達したものと考えられる。

1. 山 地

山地は湯湾岳694mを最高とし、一部に大起伏山地が見られるが、大部分は起伏量200mないし400mの中起伏山地を形成している。本島中南部は川内川、住用川、河内川、役勝川がほぼ5kmの等間隔をもって流れ、山地に深い谷を刻んでいるため、山地はほぼ同等の幅を持つブロック状の山塊に分かれている。各山塊の山稜は比較的連続し、かつ定高性を保っているため、各山塊の一つずつ山地名を付してもよいであろう。しかしここではそれらを一括して最高峰の名をとり、湯湾岳山地とした。

表形的特色としては山頂部に広い緩斜面を有すること、河川の両岸が急傾斜をなすこと、河川による浸食が進み東西兩岸を結ぶ道路の峠がかなり低いこと等があげられる。これは奄美諸島における降水量が大きいことと、高温多雨のための岩石の風化が激しく、いわゆる熱帯型山地に近い地形を示すためである。

加計呂麻島、請島、与路島の山地も基本的には湯湾岳山地と何ら変わるところがない。しかしそれぞれ独立の島をなしているため、それぞれの島名を冠する山地名を付しておいた。それぞれの山地の最高点は加崎岳321m、大山398m、大勝山297mである。

2. 低地と海岸

地域内の低地はほとんど海岸部に限られる。したがってここでは低地と海岸を一括して記すことにした。

地域の地図を一見すれば誰でもいちじるしい海岸線の屈曲に気づく。とくに大島海峡兩岸の屈曲度は五島列島や伊万里湾周辺とともに日本有数の高さを示している。これは河川浸食が進んで山地が河川沿いに深く蚕食された後におこった沈降によって生じたものである。沈降して生じたリアス式の小湾入は、本島南部の場合はそこに注入する河川の堆積によって湾頭に三角州を生じ、しだいに湾の面積を縮小して来た。また湾口には砂州が生じて東岸の住用村内海や市湊のように潟湖を生じた所もある。もとリアス式小湾の湾頭であった部分に海中堆積すなわち三角州として生じた平野は、その後河川による堆積が引きつづきおこり、一

部は明らかに陸上堆積型の谷底平野に移行している。これらは成因的に一連のものであるのでこの地形分類に当たっては両者を区別せず、三角州ならびに谷底平野として表記することにした。河川の大きさに比べて海岸の低地の割合の大きいのが奄美諸島の地形的特色の一つと言えるよう。

大島海峡兩岸には流入する大きな河川がないため湾頭部の埋積が進まず、そのため屈曲度が他の部分に比べて大きいのである。

なお住用川の河口三角州はメヒルギをはじめとするマングローブ樹林を形成し、日本における代表的な塩性湿地となっている。また湾入部以外の岩石海岸にはさんご礁がよく発達している。

3. 起伏量図・傾斜分布図および谷密度図

上に記したように奄美大島は一般に中起伏山地が多いが、雨量が多く侵食がさかんなことを反映して、傾斜は比較的急で、谷密度もかなり多い方である。しかし地形分類図に副分類の緩斜面記号をもって示した緩斜面が存在することが注目される。おそらくかつての準平原面ないし小起伏面の遺物であろう。

(米谷静二)

II 表 層 地 質

図幅の範囲は奄美大島南部と、加計呂麻島・請島、与路島などで、海岸は出入りの多い複雑な形態を示す。ほとんどが山地からなり、低地は湾入した海岸の奥部にわずかにみられるに過ぎない。全域にわたって広く固結堆積岩類が分布し、未固結堆積物の分布は低地部に限られ極めて小範囲である。火成岩類としては、古仁屋市北部と住用湾南部に分布する花崗岩類と、堆積岩類に挟在する枕状溶岩およびこれを貫く塩基性岩の岩脈などである。また名瀬層中の粘板岩にはしばしば赤紫色～灰緑色の凝灰岩を挟み部分的には堆積岩自体が凝灰質の場合がある。大島本島の西部および加計呂麻島、与路島、請島には堅硬な珪質岩が広く分布する。

年平均気温が高く、降水量が多い当地域は、全般に風化が著しく、数m以上に達するところも稀ではない。したがって固結岩類も、実際には半固結岩類として取り扱うのが実情に即している場合がしばしばである。また、岩石の種類による侵食の差によって、急峻な山の山頂部には珪質岩が残り、風化侵食され易い泥質岩の分布域が谷部を形成している傾向もみられる。

河川としては大川、川内川、役勝川、住用川などがあり、河口には小規模な沖積地を形成する。

1. 未固結堆積物

未固結堆積物としては、河川の河口にみられる沖積層が主なものであるが、出入りの複雑な海岸の湾奥部にも極めて小規模な沖積低地や砂浜がみられる。砂丘の発達は悪い。

粘土・砂・レキ

大川、川内川、役勝川、住用川に沿って河口付近にみられる沖積地や湾奥部の小低地の堆積物を構成している。後背地の地質を反映してレキ種も変化にとみ、またサンゴ破片や有孔虫殻に富む砂浜も南部地域でみられる。

2. 固結堆積岩

固結堆積岩は図副内のほとんど全域をなす山地を構成して広く分布する。岩石の種類は砂岩、頁岩、砂岩頁岩互層、粘板岩、砂岩粘板岩互層、凝灰岩、千枚岩、珪岩、珪岩粘板岩互層、石灰岩など多様なものである。したがって図幅では、岩相区分だけでなく、地質学的な意味を含め、地層区分もして示した。しかし奄美大島については、その地質および構造や時

代論については未だ不明の点も多く、今後さらに追加改訂される部分が残されている。とくに湯湾層については問題が多く、ここでは遅沢壮一・相田吉昭・中森亨ほかによる最近の解釈を大幅にとりいれた。

本地域を構成する地層は、湯湾層、大棚層、大勝層、名瀬層に区分される。

これらはいずれも、大きくみると、ほぼ北北東—南南西方向に走向し、奄美大島北部にまで連続する。またこの方向を軸としたしゅう曲がみられ、最下位の名瀬層が図幅内では繰り返して出現する。大棚層、大勝層は分布地域を別にし岩相もやや異なるものの、いずれも名瀬層の見掛け上は上位に位置し、両者は対比される可能性がある。図幅西部に広く分布する湯湾層は珪質粘板岩、砂岩、千枚岩、層状チャートや石灰岩、赤紫色凝灰岩、玄武岩、緑色岩類など多様なものからなる特異な岩相を呈する。本層は現地性の堆積物のほか異地性の岩体を多量に含む。異地性の岩体には石炭紀、二疊紀、三疊紀の紡錘虫、コノドントその他の化石を含むものもあるが、現地性の堆積物はジュラ紀後期から白亜紀初期の時代のものである。しかし、この時代の地層が、より新しい白亜紀後期の大棚層、大勝層、名瀬層の見掛け上上位に分布することについては、極めて低角度のスラストを考えて説明することもできるが、ここではその分布上の特性から大規模な海底重力移動によるものとした。

2.1 大勝層（砂岩、砂岩優勢互層、頁岩優勢互層、頁岩）

本層の模式地は奄美大島北部竜郷村、名瀬市東部などであるが、本図幅内にも名瀬市小湊、住用村を中心として分布する。砂岩および砂質頁岩、砂岩優勢互層を主とするが、粘板岩や黒色頁岩を挟む。砂岩は粗粒ないし中粒のものが多く、アルコース質で、20ないし30mの厚さに達するものもあり、小湊東方ではレキ層がみられる。また名瀬市西部から住用村住用、瀬戸内東部にかけても砂岩を挟んだ砂岩優勢互層が北北東—南南西方向に分布する。タイプのものと比較してやや泥質岩を多量に含むが、ここでは一応大勝層とした。下位の名瀬層とは断層関係で接するところもあるが、名瀬層の走向にはほぼ平行しその向斜部に分布することなどから、整合関係にあるものとした。竜郷村の大勝層分布地域の転石から、白亜紀後期のアンモナイト化石が発見されている。

2.2 大棚層（砂岩、砂岩粘板岩互層、チャート、粘板岩）

大和村大棚付近を模式地とするものであるが、分布は大勝層、名瀬層の一般走向と同じく南南西にのび瀬戸内町古仁屋から加計呂麻島、請島に達し、さらに焼内湾周縁にも分布する。主に砂岩および砂岩粘板岩互層からなる比較的砂質のもので、名瀬層と湯湾層に接する。一部ではチャートや赤紫凝灰岩、玄武岩を挟み凝灰質岩類などもみられる。走向は北北東—南

南西で、砂質部は灰色ないし灰白色を呈しのアルコース質である。見掛け上は湯湾層の下位に存在し、名瀬層の上位に位置するが、湯湾層とはスラスト関係で、また名瀬層とは多くの場合断層で接している。

2.3 名瀬層（千枚岩，粘板岩，砂岩頁岩互層，赤紫色凝灰岩，塩基性火成岩，枕状溶岩）

名瀬市南部，住用村，瀬戸内町，加計呂麻島にかけて奄美大島の東半分に分布し，また久慈湾周辺にもみられる。ほぼ北北東～南南西の走向をもつが，岩相は粘板岩ないし千枚岩など泥質岩を主とするが，砂岩粘板岩の互層も厚く，また赤紫凝灰岩質頁岩，さらに緑色～暗緑色で堅硬な塩基性岩類を挟むなど多様である。新鮮な粘板岩は黒色を呈するが，粘板岩などの泥質岩は一般に剥離性に富み，また全般的に表面は風化がすすみ軟弱化しているため大小の斜面崩壊もみられる。本層は見掛け上，最下位に位置するもので，その他質時代については，粘板岩に含まれる放射虫化石から白亜紀中後期のものとされる。しかし前述のように，少なくとも西部に分布する湯湾層よりは後期のものである。

2.5 湯湾層（チャート，チャート粘板岩互層，砂岩，塩基性火成岩類，石灰岩）

大和村，宇検村，瀬戸内町，加計呂麻島，与路島など図幅西部に分布する。チャート，珪質粘板岩，これらの互層，砂岩などと玄武岩を主とする塩基性火成岩類からなり，石灰岩，層状チャートを含む多様な岩相を呈する。粘板岩は珪質黒色のもので砂岩あるいはチャートと互層する。チャートは灰白色であるが，部分的には赤褐色を呈し，一般には数cm～10cmで成層した層状チャートが多く，厚さ100m以上に達するものも珍しくない。塩基性火成岩類は数m50mの暗緑色玄武岩で塊状をなし，石灰岩とともにレンズ状に存在する。その介在状況からみて，これらの岩体は一部の層状チャートとともに異地性のものである。前述のように，本層の異地性岩体からは古生代末から中生代初期の化石が発見されているが，現地性の部分はジュラ系に属するものとされている。本層より新しい時代の大棚層の上に大規模な重力移動で乗り上げているものと解釈される。

3. 火山性岩石

図幅中に見られる火山性岩石としては赤紫色凝灰岩，緑色塩基性火山岩類，玄武岩質岩石がある。これらは固結堆積岩類のうち名瀬層，湯湾層に顕著にみられるほか大棚層，大勝層にもみられる。一般には，千枚岩，粘板岩，チャートなどと成層し，あるいはこれらの中にレンズ状にスランプ岩塊として介在する。いずれも地層として堆積時にとりこまれているもので，異地性の玄武岩以外は，当時の火山活動と密接な関係をもつもので，しばしば相互に

漸移する。

3.1 赤紫色凝灰色

赤色～赤紫色の細粒ガラス質凝灰岩である。名瀬層に多く、湯湾層にもみられる。普通は数mのものであるが、中には数10mに達するものもある。粘板岩、千枚岩、チャート粘板岩互層などと成層して挟在する。比較的軟質で、塩基性火山岩に伴うことも多く、しばしば上下は灰緑色ないし灰色の凝灰質泥岩に漸移する。

3.2 塩基性火山岩類

従来は輝緑岩とよばれていたもので、緑色～暗緑色の堅硬致密な岩石であるが、一部ではハイアロクラスタイトや自破砕岩の様相を呈する。名瀬層、湯湾層中に層状またはレンズ状に挟在する。長石の斑晶と緑泥石を主とし、少量の緑レン石が認められ、岩体中にはしばしば方解石の細脈がみられる。

3.3 玄武岩

湯湾層にはしばしばみられ、また名瀬層中にも挟まれる。一般には暗緑色～緑色あるいは赤色の汚濁した溶岩で、凝灰角レキ岩、凝灰質頁岩を伴うことが多く、この時代の海底火山活動を伺わせる。溶岩には枕状を呈するものや自破砕溶岩も見られ、また岩脈や岩床としても存在する。湯湾層中の玄武岩類には異地性のもが多く、数mから数10m、ときには数100mにおよぶ大塊として、層状チャートや少量の石灰岩などとともに現地性堆積層中に移動岩体として取り込まれている。

4. 花こう岩質岩石

住用村市、瀬戸内町古仁屋、勝浦などに小範囲に分布する。優白色、中粒ないし粗粒の黒雲母花こう岩で名瀬層および大瀬層に貫入している。いずれの岩体も風化が進みマサ土化しており、新鮮な部分はその中にレキ状に岩塊として残っているにすぎない。

5. 石材

名瀬市朝戸、瀬戸内町阿木名などでは、大勝層、大瀬層の砂岩を対象として小規模な砕石事業が行なわれている。また大和村でも珪岩や石灰岩が、需要に応じ石材として採取されたこともある。

(露木利貞)

Ⅲ 土 壤

本図幅は奄美群島の北部に位置する大島本島の南部約1/2と、その南に接する加計呂麻島、請島、与路島などを含む地域である。

大部分が古生代～中生代の堆積岩を基岩とする山岳地帯で500m前後の山々がそびえ峻しい山岳地形をなし、ほとんどが急斜面で海へせまっている。このため、平地は極めて少なく僅かに河川の流域周辺に限られている。

気温は年平均22℃前後、日平均気温25℃以上の日が年110日前後もあり、降水量も年間3000mm程度、年間を通じて温暖で山野には亜熱帯性植物が自生している。

本地域は河川の流域や一部の海岸線に分布する低地と、陸地の大部分を占める山岳地帯の2つに大別される。

低地に分布する土壌は堆積岩の風化物に由来する褐色低地土、灰色低地土、グライ土が大部分を占め、一部の地区には砂丘未熟土も分布している。

山岳地帯に分布する土壌は赤色土、黄色土などの赤黄色土が大部分を占め、乾性褐色森林土、褐色森林土、湿性褐色森林土などの褐色森林土で、岩屑土の分布も認められる。

1 岩 屑 土

1.1 岩屑性土(L)

海岸寄りの急傾斜地帯などに分布し、頁岩、砂岩の大・巨礫を主とする。絶えず潮風が吹き上げるので礫間の土壌は大きな堅果状ないし塊状となっているものが多い。

なお、本土壌には局部的に存在する岩石地も一括した。

2 未 熟 土

2.1 砂丘未熟土壌(RS)

大島本島ならびに南部に隣接する各島々の海岸線には各地に砂丘が発達している。この砂丘地に分布する海砂よりなる土壌が砂丘未熟土壌である。全層黄褐～灰黄白の砂土で、一般にち密度は疎で、腐植の集積は少なく、乾燥しやすい。構造の発達は殆んど認められない。なお、本土壌はサンゴ礁に由来する海砂を主な母材とするため石灰分などが豊富で pH の高いものが多い。また、本図幅では一部の海岸線に分布する海砂や砂礫よりなる土壌も本土壌群に包括した。

3 褐色森林土

3.1 乾性褐色森林土壌（黄褐系）（B（Y）-d）

ごく一部の丘陵地の周辺部に分布する崩積性の土壌である。土色は10 YR前後で表土は一般に薄く深さ50 cm内外から下層は岩盤または礫層となっているものが多い。

3.2 褐色森林土壌（黄褐系）（B（Y））

浅いV字型の沢筋にあり、周囲が急斜地で降水量が集まる位置にある。一般に弱酸性で本土の暖帯南部の褐色森林土に比べて表層土の腐植含量が低く、薄くて重粘な土壌である。

森林土壌分類では適潤性黄色土（YD）として分類される土壌も一括した。

3.3 湿性褐色森林土壌（Bw）

周囲を300 m以上の尾根に囲まれたやゝ深い沢筋で、潮風が吹き込むことも少ない場所に存在し、空中湿度が高く森林植生も湿潤性のものが分布する。土壌は比較的新しく二次崩壊が進み本土の褐色森林土に類似して7.5 YRの色調であり、粘土含量は赤黄色土より低い。

4 赤黄色土

4.1 赤色土壌（R）

山岳地帯の丘陵地には5 YRまたはこれより赤味の強い色相を有する土壌が広く分布する。本調査ではこれを赤色土壌として示した。

本土壌は主に角閃石を含む凝灰岩など、赤色になりやすい母材からなり、主に強粘質土壌で土層は厚く生産力は比較的が高い。表土はりん酸や石灰、苔土などの塩基類に欠乏し酸性化のはなはだしいものが多い。

4.2 黄色土壌（Y）

山岳丘陵地帯には作土下の土色が7.5 YRまたはこれより黄味の強い色相を有する土壌が広く分布する。本調査ではこれを黄色土壌として示した。本土壌は主に砂岩、頁岩などの風化物に由来する土壌で地形、場所によって断面形態、植生に若干の違いがみられるが、一般に腐植含量の少ない壊質～強粘質の土壌で土層中に礫を含む場合が多い。また、表土は薄く有効態のりん酸や石灰、苔土などの塩基類に欠乏したものが多い。

なお、ごく一部の低地には周辺の山土を客入した造成土が分布する。本土壌はほぼ全層が腐植を殆んど含まない明黄褐色の土層であるので黄色土壌に一括して図示した。

5 褐色低地土

5.1 粗粒褐色低地土壌（BL-c）

浅い所に砂層か礫層が存在し、次層が褐色～明褐色を呈する沖積土である。

河川流域などの低地に分布し、表土は一般に薄く、透水性が割合に大で塩基類や窒素などの肥料成分に欠乏したものが多い。

本図幅では大和村西部の名音、今里地区、宇検村芦検、名柄、屋鈍地区、住用村東城、仲間、役勝地区、瀬戸内町小名瀬地区などに分布するが、その面積は比較的に小さい。

6 灰色低地土

6.1 細粒灰色低地土壌（GL-f）

作土下の色相がおむね7.5 YR～2.5 YRで灰褐色～灰色を呈し、膜状、系根状等の斑紋をもつ土壌で河川流域の沖積地に分布する。

主に粘質で土性が細かく構造の発達したものが多い。

本図幅内では名瀬市小湊地区、宇検村湯湾、部連地区、住用村東城、役勝地区、瀬戸内町諸鈍、秋徳、池地地区などに分布する。

6.2 灰色低地土壌（GL）

灰色低地土のうち、土性が砂壤土または壤土の土壌で、一般に表土は厚いが透水性は比較的に大きい。また、作土は肥料成分に欠乏したものが多い。

本図幅内では瀬戸内町渡連などに分布しその面積は小さい。

6.3 粗粒灰色低地土壌（GL-c）

灰色低地土のうち、全層または深さ25cm内外から下が砂層または礫層となっている土壌で、透水性が一般に大きく、表土は腐植や塩基類などに欠乏したものが多い。

本図幅では調査地域全域の河川流域の沖積地に割合に広く分布する。

7 グライ土

7.1 細粒グライ土壌（G-f）

50cm以内にグライ層の存在する土壌で、土性が細かく主に粘質で、丘陵間や海岸平坦地の低位部に分布する。一般に排水が悪く地下水位の高いものが多い。

本図幅では住用村東城、瀬戸内町勝浦、請阿室、与路などに分布しその面積は小さい。

7.2 グライ土壌（G）

深さ50cm以内にグライ層の存在する土壌で作土下の土性が壤土または砂壤土のものである。丘陵間の低位部に広く分布し、排水が悪く地下水位の高いものが多い。

本図幅では名瀬市の小湊地区、宇検村の湯湾、阿室地区、住用村の東城、役勝、住用、市地区、瀬戸内町の管鉦、阿木名、節子、蘇刈、安脚場地区などの沖積地帯に分布する。

土地利用、植生及び生産力などとの関連

1. 岩屑土(含、岩石地)

海岸の急傾斜地帯で、ソテツの優占度が高く、シャリンバイ、ハマビワ、アカテツ、ハマヒサカキがあり、草本でハチジョウススキ、オニヤブソテツ、ハマサルトリイバラがある。ソテツは耕地の防風林あるいは救荒植物として植栽されたものが多いが現在は殆んど利用されず放置されている。

風衝地で生産力は低い。

2. 未熟土

地域内各地の海岸線に分布する砂丘未熟土壌でアダンの優占度が高く、トベラ、ハマグルマ、ハマボウフウ、ススキなどがあり、海岸植生の後方にはシャリンバイ、ヤブニッケイなどが自生している。人工的には海岸防風林としてモクマオウが数十年來植えつがれている。

モクマオウはアルカリ土壌に耐えて、生長も早い所から速成の防風林として利用されているが、リュウキュウマツは強いアルカリ土壌に耐えないので造林されていない。

3. 褐色森林土

乾性褐色森林土壌(黄褐色系)は沖積地帯周辺部の緩斜面に分布し、主に畑地として利用され果樹類や野菜類が栽培されている。一般に土層が浅いうえに乾燥しやすいので生産力は余り高くない。

褐色森林土壌(黄褐色系)はモクタチバナ、エゴノキ、タブノキなどが多く生育し、イタジイ、イジュは少ない。

人工造林したリュウキュウマツは雑草の繁茂で消失するものが多く、スギ、ヒノキの造林地は初期の生長は優れているが10数年で停滞し、数年毎に除伐しなければ広葉樹に被圧される。人工造林したイジュは比較的によく生育している。

湿性褐色森林土壌の植生は本木ではフカノキ、草本ではクワズイモとヘゴが代表的である。人工造林したリュウキュウマツは殆んど残っていないが、スギの生育は割合に良好である。たゞ雑草が繁茂しやすいので年2～3回以上の下刈りをしなければスギは消失するので下刈、間伐を繰り返す必要がある。

4. 赤黄色土

赤色土壌は一般に土層が深く山林或いは畑地として利用されている。山林は安定した緩傾斜地が主で腐植を含むA層も厚いので林木の生育はすぐれている。自然植生はイタジイを主

とする常緑広葉樹でモッコク、ヤブニッケイ、イジュなども多い。地形的に緩やかなためにリュウキュウマツの人工林の造成も進みつつあり、生育は一般に良好である。

畑地は大半が樹園地や普通畑として利用され、樹園地ではミカン類、茶、桑などが、普通畑ではサトウキビ、野菜類などが栽培されているが、一般に管理が粗放で収量は低いものが多い。

黄色土壌は大部分が山林で一部普通畑または樹園地として利用している。

尾根筋では土層は浅くイタジイを主林木としギーマ、サクラツツジ、シバニッケイ等乾燥に耐える植生が多い。季節風や台風の影響を受け、樹高成長は極めて悪く、リュウキュウマツ人工造林また広葉樹用材林としても不適で保護樹帯として残す必要がある。

急傾斜地ではイタジイを主林木とする典型的な広葉樹林である。今日までパルプ、チップ用材として利用されてきたがイジュ、タブノキ、イスノキ、モッコク、アデク等有用広葉樹を多数含み、今後は家具、建築用材林への移行が考慮される。

この土壤地帯のリュウキュウマツ人工林は生育良好であるがスギ、ヒノキは不成績なものが多い。

普通畑では野菜類やサトウキビなどが栽培されているが、土層が乾燥しやすいうえに表土は有効態のりん酸や石灰、苦土などの塩基類に欠乏し生産力が低いうえに、管理が一般に粗放で収量は低いものが多い。

樹園地では果樹類、茶、桑などが栽培されているが土層が浅いうえに一般に乾燥しやすく生産力は低い。

5. 褐色低地土

粗粒褐色低地土壌は大部分が水田であるが現在は畑地として利用され、サトウキビ、野菜類、花草類が栽培されている。壤質で耕作は割合に容易であるが、表土は薄く肥料成分に欠乏し、さらに乾燥しやすく生産力が低いので堆きゅう肥の増施などによる土壌改良が必要である。

6. 灰色低地土

細粒灰色低地土壌は水田として利用されていたが、現在は一部の地区で野菜などを栽培している以外は余り利用されていない。本土壌は一部の強粘質の地区を除いて畑利用も容易で生産力も比較的に高いので堆きゅう肥の増投などによって地力を高め、土地の高度利用をはかることが必要である。

灰色低地土壌、粗粒灰色低地土壌は大半が畑地として利用され主に野菜類が栽培されてい

るが、一部は樹園地としてミカン類も植栽されている。

本土壤は表土が薄いうえに耕土中に礫を多く含むため土壌は乾燥しやすく生産力が低いので堆きゅう肥等を増投による地力の増強をはかることが必要である。

7. グライ土

細粒グライ土壌、グライ土壌は大半が水田として利用され、水稻の二期作が行なわれていたが、湿田または半湿田で水稻は根腐れ等の障害を受けやすく生産力が低いうえに、現在は米の生産調整等で放置されたものが多く余り利用されていない。このため、排水路を整備するとともに客土によるかさあげ等を実施し、乾田化をはかるほか、マコモ、ミズイモなど栽培可能な作物の導入、普及に努めることも必要である。

農用地関係調査担当者

鹿児島県農業試験場	穂原 関雄
〃	草水 崇
〃 大島支場	小原 秀雄
〃 〃	友野 育造

林地関係調査担当者

鹿児島県林業試験場	山内 孝平
〃	瀬戸口 徹
〃	寺師 健次

IV 土地利用現況

当地域の土地利用現況は、大島本島南部、加計呂麻島、請島、与路島などの地形が、急斜面を持った山地が多いため、林地が大部分を占め、出入の多い海岸線の湾奥部に小規模の三角洲、谷底平野等の平坦地があり、市街地集落、農地等に利用されている。海岸線等に荒地が分布し、面積は林地に次いで多い。

表IV-1 土地利用現況

(単位：ha)

市町村名	田	畑	果樹園	樹木の畑	森林	荒地	建物用地	幹線交通用地	その他の用地	湖沼	河川地	海浜	合計面積
名瀬市	281	1,087	0	0	10,028	830	246	0	39	0	49	80	12,653
大和村	124	609	9	2	7,018	1,124	46	0	6	0	5	44	8,996
宇検村	193	254	0	3	7,740	1,902	67	0	8	0	27	43	10,271
瀬戸内町	303	1,414	0	0	20,480	1,232	296	0	19	0	5	240	24,055
住用村	227	180	0	0	9,905	1,088	51	0	5	0	61	37	11,575
合計	1,128	3,544	9	5	55,171	6,167	706	0	77	0	147	444	67,550

注) 国土数値情報(土地利用)による。

1. 市街地、集落、その他

瀬戸内町の役場所在地である古仁屋には行政機関、商店等も多く、市街地を形成している。また瀬戸内町では、本島の阿木名、篠川、嘉鉄、加計呂麻島の諸鈍、与路島の与路等が主な集落である。

宇検村では、役場所在地の湯湾が集落として大きく、芦検、田検等が主な集落である。

住用村は、役場所在地の西仲間のほか、山間、役勝、市等の集落がある。

大和村の当該区幅内の集落は、名音、今里、志戸勘、名瀬市の当該区幅内の集落は小湊、西仲勝、伊津部勝等である。

その他として、採石場が名瀬市の伊津部勝、住用村山間に2ヶ所、瀬戸内町阿木名、大和村名音等にある。

2. 農 地

水田は、名瀬市の小湊、住用村の東仲間、宇検村の湯灣、瀬戸内町の嘉鉄、諸鈍、与路等にわずかに残るだけで、ほとんど乾田化、客土による畑地化され、野菜、サトウキビ等が作付されている。

普通畑地の分布は多くないが、野菜、サトウキビ等が栽培されている。

樹園地は、大和村のスモモ、住用村のポンカン及びタンカン等の果樹園地が分布し、茶、桑なども小規模に見られるが、荒廃している。

表IV-2 地域の農地面積

(単位: ha)

市町村名	経営耕 地面積	田	畑				樹 園 地				草 地	
			計	普通 畑	牧草 専用	休作畑 ※	計	果樹 園	茶園	桑園		その他 樹園地
名 瀬 市	231	60	98	64	0	34	73	69			4	0
大 和 村	79	5	29	19	-	10	46	36	1	9		-
宇 検 村	43	5	26	26	-	-	13	9		4		2
瀬戸内町	295	56	207	155	12	40	33	28		6	1	39
住 用 村	113	46	29	15	0	14	37	37		-	0	-
合 計	761	172	389	279	12	98	202	179	1	19	5	41

注) 1980年世界農林業センサス結果

※過去1年間作付けしなかった畑

3. 林 地

昭和56年度鹿児島県林業統計によると、林野面積は総面積の88.3%を占めており、県全体の比率64.2%に比べて極めて大きい。

林野面積に対する国有林率は7.7%と小さく、ほとんどが公私有林で占められている。公私有林の樹種別では表IV-3のとおり、広葉樹68.6%、針葉樹23.8%、その他7.2%等で人工林率18.1%と県全体の平均に比べて低い。

島内の奥地の山地には、イタジイを主とし、モッコク、ヤブニッケイ、イジュ等の常緑広葉樹林が広く分布し、海岸部には、シャリンバイ、ハマビワ、アカテツ、ハマヒサカキ等の常緑広葉樹が分布する。

砂質海岸の防風林としてモクマオウが植えられている。

針葉樹は海岸部山地にリュウキュウマツの人工林及び天然林が分布し、奥地の山地にはスキ、ヒノキの人工林が小規模に見られる。

海岸の急傾斜地帯は、ソテツが多く見られる。集落の周辺では救荒植物として植栽されたものが多い。

また、伐採跡地、未立木地の分布も広い。

表 IV - 3 地域の林野面積及び樹種別林野面積 (単位: ha)

市町村名	総面積	林野面積	固有林	固有林率 (%)	公 私 有 林					
					計	針葉樹	広葉樹	竹採	その他	人工林率 (%)
名瀬市	12,752	10,608	546	5.1	10,062	3,115	6,357	104	486	27.4
大和村	9,035	7,745	22	0.3	7,723	1,337	5,820	48	518	15.3
宇検村	10,255	9,309	918	9.9	8,391	2,764	5,264	9	354	22.8
瀬戸内町	23,899	21,043	1,293	6.1	19,750	4,151	13,555	52	1,992	12.8
住用村	11,765	11,081	1,813	16.4	9,268	1,771	6,852	39	606	17.4
合計	67,706	59,786	4,592	7.7	55,194	13,138	37,848	252	3,956	18.1

注) 昭和 56 年度 鹿児島県林業統計による。

4. 荒 地

海岸の急崖地、海浜地、住用村のマングローブ、宇検村湯湾の干拓地の未利用地等である。

(前野昌徳)

昭和 59 年 2 月 印刷発行

奄美群島地域
土地分類基本調査

奄美大島南部
(西古見・湯湾・小湊・請島・古仁屋)

編集発行 鹿児島県企画部開発調整課
鹿児島市山下町 14-50

印刷 富士マイクロサービスセンター
熊本市水前寺 6 丁目 46-1